

翻訳イクバル著『自我の秘密』その(2)

片岡 弘次 (大東文化大学名誉教授)

Translation of Iqbāl's *Asrār-e Khodī*, No.2

Hiroji KATAOKA

要旨

その(1)と同じ。但しその(2)では訳書『自我の秘密』の第7章より第13章までであり自我とはどのようなものであるかが具体的な例をもって述べられている。

目次

- 第Ⅶ章 プラトンの思想により、スーフィズムやムスリム諸民族の文学は多大なる影響を受けたが、プラトンは、その仕方は羊の仕方であった。それ故、その考えより遠ざかっていることが必須である。
- 第Ⅷ章 詩の真の価値とイスラーム文学の改革について。
- 第Ⅸ章 自我の発展階段は次の三つの場面がある。第一段階は服従。第二段階は自己管理。第三段階は神の代理。
- (1) 第一段階、服従。
- (2) 第二段階、自己管理。
- (3) 第三段階、神の代理。
- 第Ⅹ章 預言者アリー・ムルタザーの名前の秘密の説明。
- 第Ⅺ章 サイド・マクドゥーム・アリー・フジュウィーリーの許に来て、敵の暴虐を嘆くメルヴ出身の若者の話。
- 第Ⅻ章 喉の渇きに耐えられなくなった鳥の話。
- 第Ⅼ章 ダイヤと石炭の話。

第Ⅶ章

プラトンの思想により、スーフィズムやムスリム諸民族の文学は多大なる影響を受けたが、プラトンは、その仕方は羊の仕方であった。それ故、その考えより遠ざかっていることが必須である。

1. その昔の修道士、哲学者⁽¹⁾プラトンは
 ⁽²⁾時代遅れの羊の群れと関係があった。
2. その⁽³⁾駿馬は理性の暗闇の中で迷った
 存在の山中に投げ込まれ動けなくなった。
3. 彼は⁽⁴⁾知覚できない物に魅せられ
 手や目、耳を信頼しなかった。
4. 彼は言った、「人生の秘密は⁽⁵⁾死ぬことにある
 燭台の灯を消すことで数百の顕現がある」
5. 彼はわれわれの思考を支配した
 だが⁽⁶⁾その杯は眠気を催させ現実世界の否定であった。
6. 彼は人間の衣服を着た羊である
 その教えはスーフィー達の魂を完全に支配した。
7. 彼は自らの知性を天まで届けた
 そして現実世界を⁽⁷⁾作り話と呼んだ。
8. 彼の仕事は⁽⁸⁾人生の諸部分の分析
 彼は人生の美しい糸杉の枝を切り落とすことの役。
9. ⁽⁹⁾プラトンの思考は損失を利益と言った
 その哲学は存在を非存在と言った。
10. 彼の本性は眠り、一つの夢を生んだ
 彼の知性の目は一つの⁽¹⁰⁾蜃気楼を生んだ。
11. プラトンは行為への興味を欠いた
 それ故彼の魂は無の賛美者だった。
12. プラトンは⁽¹¹⁾存在の混乱を拒否した
 プラトンは⁽¹²⁾外部に存在しないものを創造した。
13. 生きた魂にとっては⁽¹³⁾可能性の世界がよい
 死んだ心にとっては⁽¹⁴⁾想像の世界がよい。
14. その⁽¹⁵⁾鹿は優美な物腰の楽しみを欠いている
 その⁽¹⁶⁾鷓鴣には歩き振りの喜びは禁じられている。

⁽¹⁾ 前 428・27～前 348・47、イスラーム世界でもっともよく知られたギリシア哲学者の一人。

⁽²⁾ この世で努力をせずこの世を捨てた人々。

⁽³⁾ フェルドウスィーによるイランの大民族叙事詩『シャー・ナーメ』に出てくるロスタムの愛馬。転じてプラトンの思考で、現実の世界と関係を断ってしまった思考。

⁽⁴⁾ 五感の世界を妄想の世界と考え重視せず、知識を得ることは単に知識獲得だけのためで、その結果、努力の考えもなくなる。

⁽⁵⁾ この世は欺瞞に満ちているので、ムスリムのスーフィー（神秘主義者）も同じ考え。

⁽⁶⁾ その哲学は人間を役立たなく無行動にさせ、社会との関係を終らさせるもの。

⁽⁷⁾ 物質の世界を存在しないものとして民族や人々の努力を軽視した。

⁽⁸⁾ プラトンは生の真実とこの世の人間との関係に疑いを持っていた。

⁽⁹⁾ この世や生についてプラトンの否定的見解。

⁽¹⁰⁾ 存在の世界を妄想と欺瞞と考えている。

⁽¹¹⁾ 現在の世界の輝きや賑わい。

⁽¹²⁾ これから生じる物を重要視する。

⁽¹³⁾ 消滅する世界。因果関係のある世界には人間の努力が感じられ、宇宙征服の可能性もあり、イクバルはこの世界を良いとする。

⁽¹⁴⁾ プラトンの考える世界。

⁽¹⁵⁾ プラトン流の考えでは力強さが無い。

⁽¹⁶⁾ きじ科の鳥。プラトンの思想の比喩。

15. その露は落ちる力を持ち合わせていない
その鳥は囀る力を持ち合わせていない。
16. その種は成長する喜びを持たない
その蛾は身を悶えることを知らない。
17. わが修道士は逃亡以外どんな救いも持たなかった
この世と⁽¹⁷⁾闘う力を持たなかった。
18. それ故⁽¹⁸⁾心は消えてしまった炎を愛した
阿片を吸う絵を愛した。
19. ⁽¹⁹⁾彼は自分の巢から⁽²⁰⁾天の方へ飛び立った
しかし再び自分の巢に戻らなかった。
20. ⁽²¹⁾天の壺の中に彼の思想は消えてしまった
わたしには分からない それが沈殿物かそれとも⁽²²⁾土瓶の欠けらか。
21. ⁽²³⁾諸民族はその怠慢で餌食となった
眠ってしまい行動の楽しみを無くしてしまった。

第八章

詩の真の価値とイスラーム文学の改革について。

I

1. 人間は願望の焼き印で熱き血となる
この⁽¹⁾土塊は願望の灯で火となる。
2. 願望は人生の杯の酒である
それで人生に活気や意気込みが生じる。
3. 人生とはただ⁽²⁾征服がテーマである
願望とはただその征服のための魔術である。
4. 人生とは獲物を捕えることで願望は罨である
願望は美に対して愛からのメッセージである。
5. 願望は毎瞬なぜ出て来るのか
それは人生の歌に対しての⁽³⁾高低のリズムである。
6. 美しく優美で立派であるもの
⁽⁴⁾それは探究の荒野でわれわれにとり案内人となる。
7. その絵はあなたの心の中に確り根付き
そしてあなたの心の中に願望をうむ。
8. 美は願望の春の創造主である
その⁽⁵⁾顕現は願望を育てるものである。
9. ⁽⁶⁾詩人の胸は美の展示場である
その⁽⁷⁾シナイ山より美の光が溢れ出る。

⁽¹⁷⁾ 永遠を得るための努力の力。プラトンが示した哲学は逃亡の哲学だった。

⁽¹⁸⁾ その哲学は無感覚で熱情を欠いていた。

⁽¹⁹⁾ プラトン。

⁽²⁰⁾ 空想の世界へ飛び、そこで真実の世界を忘れてしまった。

⁽²¹⁾ プラトンは何かの問題を探究する時には大きな土壺の中に入って思考したと言われている。

⁽²²⁾ 土瓶はその形が天と似ているので天の比喩。

⁽²³⁾ プラトンの哲学の影響を受けた民族。

⁽¹⁾ 人間は高い目的で偉大となる。

⁽²⁾ 単に食べ、寝たり起きたりするのではなく、宇宙を征服すること。

⁽³⁾ これなしでは創造はない。

⁽⁴⁾ 美を求めることは人間の本性であり、人間はその獲物のため努力をする。

⁽⁵⁾ 美の魅力。

⁽⁶⁾ 単なる詩人でなく、高い理想と目標を持つ詩人。

⁽⁷⁾ シナイ半島南部の山、モーセ山のこと。ここでムーサーが見た一点の火（クルアーン第28章29節参照）

10. その詩人の目により美しいものが更に美しくなる
その詩句の魔術によりその本質が更に美しくなる。
11. その⁽⁸⁾息で小夜鳴鳥は旋律を学んだ
その頬紅が花の顔を輝かせた。
12. ⁽⁹⁾蛾の心の中にその情熱がある
それで愛を華やかな話にする。
13. ⁽¹⁰⁾その泥や水の中に陸地や海が隠れている
無数の新しい世界がその心の中に隠されている。
14. その頭の中にはまだ開いていないチューリップがある
まだ聞かされていない歌や嘆きもある。
15. その思考は月や星々と同じ高さ
⁽¹¹⁾醜さを知らず善を作るもの。
16. ⁽¹²⁾道案内人であり、その⁽¹³⁾暗黒の中に命の水がある
その目の⁽¹⁴⁾水で宇宙は更に生き長らえる。
17. われわれは動きが⁽¹⁵⁾緩慢、確りせず理解が遅い
⁽¹⁶⁾目的の道で倒れてしまった。
18. その⁽¹⁷⁾小夜鳴鳥は囁り始めた
それはわれわれのために何か⁽¹⁸⁾策略を考えた。
19. われわれを生生の天国に引き入れようとして
われわれの生の⁽¹⁹⁾弓が完全な環になるように。
20. 隊商はその⁽²⁰⁾鈴の音で一路旅路に着く
笛の音に従って一路旅路に着く。
21. その⁽²¹⁾そよ風が花園に吹き渡ると
その優しさが⁽²²⁾バラやチューリップの中に忍び込んでくる。
22. その⁽²³⁾魔法によって生の力が増える
生は自ら⁽²⁴⁾検査し前に進むため不安となる。
23. 詩人は世の人々を食卓に招待する
そして自らの情熱の火を⁽²⁵⁾風のように安価で売る。

II

24. ⁽²⁶⁾死を喜ぶ民族は残念である
その⁽²⁷⁾詩人が人生の興味に背を向けている。

⁽⁸⁾ 詩人による詩。小夜鳴鳥のさえずりも花が赤くなることは自然の理であるが、イクバルはこれらすべての原因を詩人の詩によるとしている。

⁽⁹⁾ 詩人の心の中。

⁽¹⁰⁾ 詩人の心。

⁽¹¹⁾ 正しい詩人は悪い思考の代りに良い思考を提示する。

⁽¹²⁾ 預言者の一人で生命の水を飲み永遠の生命を保ち、道案内をする。

⁽¹³⁾ 詩人の心の中。

⁽¹⁴⁾ 涙。

⁽¹⁵⁾ 努力の気迫が見えない。

⁽¹⁶⁾ やる気がないので目的地まで達せられない。

⁽¹⁷⁾ われわれが実行力を欠いた時、詩人は。

⁽¹⁸⁾ 覚醒と熱意を生じさせる計画。

⁽¹⁹⁾ 弓はそれ自身半円であるので。即ちその半分を補い、民族が完全な高い位置を得るため。

⁽²⁰⁾ 民族に正しい目的を語る詩人のメッセージ。

⁽²¹⁾ 詩人の思想。

⁽²²⁾ 民族の心。その中に強力な革命が生じる。

⁽²³⁾ その中に存在する思想やメッセージが民族の偉大さと生存の方に進むための力。

⁽²⁴⁾ 生は民族の弱点や未熟を示唆して自覚となるような治療の提案をする。

⁽²⁵⁾ 風は道にある物すべてに触れるように、詩人は自分の情熱に言葉の姿を与えて万人に届ける。

⁽²⁶⁾ 行動への情熱の死。民族が努力や行動に無縁になるとその怠惰が安楽を用意しても衰退の餌食となりその存在を失うので。

⁽²⁷⁾ 詩人の仕事とは自分の民族に行動のメッセージを出し、民族を覚醒させること。

25. その⁽²⁸⁾鏡は醜い物をも美しく見せる
その⁽²⁹⁾美酒で肝臓の中にはたくさんのメスが刺さっている。
26. ⁽³⁰⁾その口付けは花から新鮮さを奪ってしまう
飛翔の楽しみを小夜鳴鳥から奪ってしまう。
27. おまえの神経はその阿片で役立たなくなる
その主題の⁽³¹⁾値段は人生である。
28. それは⁽³²⁾系杉より美の麗しさを奪ってしまう
その冷たい息で⁽³³⁾白鷹がきじ鳩になってしまう。
29. そのような詩人は魚で頭から胸まで人間
海の中では人魚である。
30. その声で船乗りに魔法を掛け
船を海の深みに沈めてしまう。
31. その歌はあなたの心から堅忍不拔の精神を盗み取ってしまう
あなたはその⁽³⁴⁾魔法で死を生と考えてしまう。
32. それは存在の願望をあなたの魂から奪い取ってしまう
それはあなたの鉾山から⁽³⁵⁾赤いルビーを奪い取ってしまう。
33. それは益を⁽³⁶⁾損として提示する
それは称賛すべきものを非難すべきものとして提示する。
34. それはあなたを心配の海に投げ込む
それはあなたを⁽³⁷⁾実行を知らなくさせる。
35. それは疲れているがわれらはその言葉で更に疲れる
宴はその杯の回し合いにより更に疲れる。
36. その⁽³⁸⁾春雨の中には稲妻の小川がない
その花園は⁽³⁹⁾色と匂いの欺瞞である。
37. その美は⁽⁴⁰⁾真実と関係がない
その⁽⁴¹⁾海には傷物の真珠のほかにも何もない。
38. ⁽⁴²⁾それは眠りを目覚めより良いものと考えている
それはわれわれの⁽⁴³⁾火をその息で消している。
39. 心臓はその小夜鳴鳥の歌に毒され
その花の山の下に蛇がまどろんでいる。
40. その水差し、その酒壺、そして杯から離れていよ
その鏡のような澄んだ酒より離れていよ。

Ⅲ

41. おまえはその⁽⁴⁴⁾朝酒を飲んで倒れた

⁽²⁸⁾ 無目的の詩人。

⁽²⁹⁾ 行動の気持を起させない詩は怠慢に陥った民族をさらに無感覚にさせている。

⁽³⁰⁾ 変革の意識がなく体制に順応している詩作。

⁽³¹⁾ おまえの人生は悲観的な詩人の思想の影響を受けて、台無しになってしまった。

⁽³²⁾ それは美しく背の高い木で、美しさの比喩。

⁽³³⁾ 白鷹は勝れた鷹で、きじ鳩は劣った鳥。読者は劣った詩の影響で臆病な人生を送らねばならなくなる。

⁽³⁴⁾ 生の目標は宇宙の征服であるが、その詩は人間の可能性を教えず実践の気持も教えない。

⁽³⁵⁾ 行動の力の意。

⁽³⁶⁾ 人生の真実に反するもの。

⁽³⁷⁾ この状態で人々を役立たない人生を送らせる者にする。

⁽³⁸⁾ 春の季節が始まり最初に降る雨。その雨の最初の一滴が貝の中に入ると真珠になると言われている。

⁽³⁹⁾ 造化の花のようで、色も匂いもない花。

⁽⁴⁰⁾ 誇張と極端だけで真実からは遠い。

⁽⁴¹⁾ 人間の世界。

⁽⁴²⁾ その詩人は。

⁽⁴³⁾ その詩人の詩はわれわれのやる気を増大させる代わり能力や力を麻痺させている。

⁽⁴⁴⁾ 朝に飲む酒。

- おまえの⁽⁴⁵⁾朝はその水差しの東から始まった。
42. おまえの心はそのような歌で情熱を欠いてしまった
耳を通しておまえは殺し屋の毒を取ることになってしまった。
43. おまえの仕方は衰退の証拠である
おまえの⁽⁴⁶⁾楽器の弦は音をなくしている。
44. おまえはその怠惰で哀れになった
この世でおまえはムスリムの恥となった。
45. ⁽⁴⁷⁾花の葉脈におまえを結びつけられる
そよ風でおまえは傷つけられる。
46. ⁽⁴⁸⁾おまえの嘆きで⁽⁴⁹⁾愛は辱められ
おまえの⁽⁵⁰⁾ベザードにより似顔絵が不器量となった。
47. その顔は⁽⁵¹⁾おまえの責苦で青ざめた
おまえの冷談はその火の熱を冷ましてしまった。
48. それは⁽⁵²⁾おまえの知的疲労で知的疲労となり
それはおまえの無能力で無能力となっている。
49. おまえの愛の杯には子供のよう泣く以外は何もなく
その家の財産はただ嘆くだけである。
50. 居酒屋に求めて⁽⁵³⁾それはほろ酔い気分となり
それは家の穴より恋人を盗見する者である。
51. それは悲しくゆううつで傷ついた者
恋人の家の⁽⁵⁴⁾門番の蹴っ飛ばしをくらい死んでしまう者。
52. 悲しみで葦のようにひからびている
⁽⁵⁵⁾それがその唇の上に天に対して数千の不平がある。
53. へつらいや憎しみはその鏡の宝
無力はその古い友である。
54. それは不幸で、被征服民、そして卑しい性質
それは下品で、絶望で失敗である。
55. ⁽⁵⁶⁾その悲嘆はおまえの魂からおまえの元手を奪った
それは友の目より眠りの味を奪った。
56. 残念、その⁽⁵⁷⁾火が消えてしまった愛は
⁽⁵⁸⁾ハラムで生まれ偶像殿で消えてしまった愛は。

IV

57. 袋の中に⁽⁵⁹⁾詩の現金を持つ者よ
人生の試金石の上でそれを試してみよ。

⁽⁴⁵⁾ その朝の日の昇りは水差し、即ち東から。

⁽⁴⁶⁾ その詩作が人々を無力と無実行にし、衰退の餌食とした。

⁽⁴⁷⁾ 力のなさの比喩。この対句は弱いことの様子を示している。

⁽⁴⁸⁾ 愛。

⁽⁴⁹⁾ 愛は我慢を要求していたが、相手が我慢をしなかったのだ。

⁽⁵⁰⁾ 画家。もともとの意味は、イランを中心としたサファヴィー朝（1501～1736年）の初期にいた有名な画家。

⁽⁵¹⁾ 愛が増加する代わり減少した責苦。

⁽⁵²⁾ 愛。

⁽⁵³⁾ 愛。

⁽⁵⁴⁾ この様な表現はウルドゥー語の詩の中に多い。

⁽⁵⁵⁾ 愛で擬人化されている。

⁽⁵⁶⁾ 対句53より55の述べ方はウルドゥー詩での特徴的言い回しである。

⁽⁵⁷⁾ 民族を情熱で強力にするかわり弱小化させる愛は。

⁽⁵⁸⁾ カアバ聖域。

⁽⁵⁹⁾ 民族の中に情熱を生み、絶望の泥沼から出す力のある物。対句57より対句69までイクバルから当時の詩人へのメッセージである。

58. ⁽⁶⁰⁾ 明敏な思想は実践にとり案内役である
それは稲妻の輝きのように雷鳴より先にある。
59. 文学において ⁽⁶¹⁾ 正しい思想を使わねばならない
⁽⁶²⁾ アラブの方に戻らねばならない。
60. 心をアラブの ⁽⁶²⁾ 恋人に任せよ
⁽⁶³⁾ クルドの夜から ⁽⁶⁴⁾ ヒジャーズの朝が明けるように。
61. おまえは ⁽⁶⁵⁾ 非アラブの花園より花を摘んだ
おまえはインドやイランの新しい春を見た。
62. 少し ⁽⁶⁶⁾ 砂漠の熱さを味わえ
棗椰子で作った ⁽⁶⁷⁾ 昔の酒を飲め。
63. 頭をしばらくその熱い胸に置け
体を一時その熱い嵐の中に置け。
64. しばらくおまえは ⁽⁶⁸⁾ 絹地の衣服を着てころげ回っていた
今度は少し厚目の粗布の綿布にも慣れよ。
65. 幾世紀にもわたって ⁽⁶⁹⁾ おまえは絹の衣服に包まれて踊っていた
顔を花のように露で洗っていた。
66. 今度は ⁽⁷⁰⁾ 炎熱の砂の上に横たわれ
今度はザムザムの泉にもぐれ。
67. ⁽⁷¹⁾ 小夜鳴鳥のようにさえずる興味はいつまで
花園の中に住み続けるのはいつまで。
68. 詩人よ、おまえは ⁽⁷²⁾ 鳳凰のような畏のせいで高き地位を得ているが
住処は ⁽⁷³⁾ 高い山の上につくれ。
69. 雷や雷鳴の側にあるような ⁽⁷⁴⁾ 住処
雄の白鷹の巣よりも高い所にあるような住処。
70. ⁽⁷⁵⁾ 人生の混乱に立ち向かえるような
おまえの体と心が人生の火で熱くなるような。

第Ⅹ章

自我の発展段階は次の三つの場面がある。第一段階は服従。第二段階は自制。第三段階は神の代理。

(1) 第一段階、服従

1. 奉仕や労苦は駱駝の仕方である
辛抱や我慢強さは駱駝の慣いである。

⁽⁶⁰⁾ 詩人が人生の明るい面をテーマにすると、民族に対しての案内役となる。
⁽⁶¹⁾ イスラーム共同体の中に実践を生み、あらゆる衰退から逃れられる思想。
⁽⁶²⁾ 技巧を排し、真実に基づく立場。
⁽⁶²⁾ アラブ文学に出てくる恋人の名前。
⁽⁶³⁾ トルコ、イラン、イラクにまたがる地域でクルディスタンと呼ばれている。
⁽⁶⁴⁾ サウディアラビアの紅海寄り西部山岳地域の名称。この地域にマッカやマディーナがある。なおこの対句の全体の意味はムスリムに正しい方向を示す文学を作れの意。
⁽⁶⁵⁾ インドやイラン。即ちウルドゥー詩の殆どの伝統は極端や誇張で、真実から遠いイランやインドの詩の伝統を受けている。
⁽⁶⁶⁾ アラブの写実主義の文学。
⁽⁶⁷⁾ イスラーム共同体にその文学をもって正しいイスラームを作れ。なお対句 61、62 は連続するもの。
⁽⁶⁸⁾ その中に上品や優華、花や小夜鳴鳥の文学を愛し作っていた。
⁽⁶⁹⁾ 長い間、詩人は役立たないことを語り、真実のない詩作をしてきた。
⁽⁷⁰⁾ イスラームの詩作をせよ。
⁽⁷¹⁾ 対句 65 より対句 67 まででウルドゥー詩の中に真実味がなかったことを述べている。
⁽⁷²⁾ 想像上の吉兆の鳥でその影が頭に差した人は王になれると言われていた。
⁽⁷³⁾ 緑の野の住処は平穏な生活を意味するが、山の上の住処とは努力と飛翔の人生である。
⁽⁷⁴⁾ 詩人のいるべき所。
⁽⁷⁵⁾ この対句 75 の以前の対句でさまざまな象徴と比喩を通して詩はどうあるべきかを述べてきたが、ここでその結論が述べられている。

2. その足取りは道で音を立てない
それは隊商にとり砂漠の船である。
3. その足跡はどこの茂みにもみられ
眠るのが少なく食べるのも少なく働き者である。
4. 荷を背中で負い喜んで行く
足を動かし目的地に向かって行く。
5. ⁽¹⁾ 駱駝はその速さに酔い
旅で自分の乗り手以上に忍耐力がある。
6. おまえも ⁽²⁾ 宗教的義務を遠ざけるな
そうすれば ⁽³⁾ 神との一緒の場所も得られるだろう。
7. 怠慢に慣れている人間よ 神に服従する努力をせよ
というのは ⁽⁴⁾ 無理矢理することで権限を生めるので。
8. ⁽⁵⁾ 服従で無力な者が能力ある者になる
それに ⁽⁶⁾ 反して火も不服従で灰になる。
9. 月や星々を征服した者は
以前、自分自身を ⁽⁷⁾ 何らかの決まりで拘束した。
10. 空気は花の監獄の中で芳香になる
そして芳香を閉じ込め ⁽⁸⁾ 麝香鹿の袋となる。
11. 星々は目的地に向って歩みを進める
星々の前にある ⁽⁸⁾ 法則を認めながら。
12. ⁽⁹⁾ 緑の葉は成長の体系に従って成長する
その回転の放棄で成長が止まる。
13. チューリップの法則とはチューリップが絶えず燃えていることである
そしてその ⁽¹⁰⁾ 血はその血管の中で踊っていることである。
14. 滴は一緒になるという性質で ⁽¹¹⁾ 川になる
土塊は一緒になるという性質で砂漠になる。
15. すべての物の中味は法によって強くなる
なぜおまえはそれらの物から ⁽¹²⁾ 顔を背けるか。
16. 昔の ⁽¹³⁾ 法より自由になってしまった者よ
⁽¹⁴⁾ 銀の鎖をもう一度 足飾りにせよ。
17. ⁽¹⁵⁾ 法の厳しさの重荷に不平を言うな
⁽¹⁶⁾ 預言者の決めた限度の外へ行くな。

(2) 第二段階、自己管理

1. おまえの意気は駱駝のように自らを養うものである

⁽¹⁾ 対句1より対句5まででイクバルは駱駝の忍耐力 即ち服従の例として述べている。

⁽²⁾ 礼拝や断食などの五行。

⁽³⁾ アッラーの御側こそは、最高の安息所である、クルアーン第3章14節参照。

⁽⁴⁾ 高度で真の自由は服従、即ち義務の束縛で生じる。

⁽⁵⁾ イスラーム法。

⁽⁶⁾ 束縛なしでは、どんな人間も世間の点からしてなんの地位も望めない。

⁽⁷⁾ 服従で人間の中に征服力が生じるので。

⁽⁸⁾ しか科の哺乳動物。シベリアやチベットなどの森林に住み、おすの腹部より麝香を取る。

⁽⁹⁾ 天体の体系。

⁽¹⁰⁾ 対句12以下対句17まで比喩やたとえの表現を使い、イスラーム法などの束縛を受け入れれば高い地位を得られるが他の仕方では不名誉や崩壊を招く運命となることを述べている。

⁽¹¹⁾ 常に踊っていることで新鮮さを意味する。

⁽¹²⁾ これも川になるという性質、即ち束縛がある。さもないと滴はすぐ消滅してしまう。土塊も同じである。

⁽¹³⁾ それでは怠慢が分からない。

⁽¹⁴⁾ イスラーム法。

⁽¹⁵⁾ 失ってしまった地位。

⁽¹⁶⁾ イスラーム共同体の福祉や繁栄になるもの。

⁽¹⁷⁾ 預言者ムハンマドが決めた慣習。その慣習の束縛を受けることは必須である。

- それは⁽¹⁾自惚屋で自己愛が強く強情である。
2. 大胆になれ、手にその手綱を取れ
おまえが宝石になるように、たとえ砂利であっても。
 3. 自らに命令しない者は
他からの命令を受けねばならない。
 4. おまえの⁽²⁾建設は泥で出来ている
その過程に愛と恐怖の混合がある。
 5. この世の恐怖、来世の恐怖、命の恐怖
そして天地から届く悲しみや苦しみの恐怖。
 6. 富や財産に対する愛、祖国に対する愛
そして愛する人や親類縁者に対する愛、女性への愛。
 7. 水や土の混合は肉体を育成する
そして肉体は⁽³⁾罪の観念を無くさせるものである。
 8. おまえが手に⁽⁴⁾「神はなし」の杖を持っている限り
恐怖の魔法を壊せるだろう。
 9. ⁽⁵⁾神が命のように体の中に存在する者は
誤りの力の前に首を下げないであろう。
 10. そのような人の胸の中には恐怖にとっての道はない
その心は神以外は恐れない。
 11. 「アッラーの外に神はなし」の世界に住む者は誰でも
⁽⁶⁾女性や子供たちの束縛より自由である。
 12. そのような人はアッラーと関係を持たない人とは関係を持たない
またそのような人は息子の喉に⁽⁷⁾ナイフを突き付けられる。
 13. ⁽⁸⁾一つの神と一緒にいることは大勢の軍隊と一緒にいるようである
⁽⁹⁾その命はその人の目にとり風よりも安い。
 14. 「アッラーの外に神はなし」の句は貝で、礼拝は真珠である
敬虔なムスリムにとり礼拝は⁽¹⁰⁾巡礼期間外の巡礼である。
 15. 礼拝はムスリムの手の中にある短刀のようなものである
⁽¹¹⁾売春、反乱、罪悪を殺すものである。
 16. ⁽¹²⁾断食は飢えと喉の渇きに夜襲を掛ける
それは体の育成をする⁽¹³⁾ハイバルを征服する。
 17. ⁽¹⁴⁾巡礼は敬虔なムスリムに心の明るさを目覚めさせるものである
巡礼は⁽¹⁵⁾聖遷を教え、地理的限界の考えを止めさせるものである。

⁽¹⁾ 駱駝の美点は既に述べられており、今その悪い所が述べられ、人間的な魂が欠けている。駱駝の一つの欠点は恨みを持つことである。

⁽²⁾ 存在の基礎。神はおまえを泥で作った。

⁽³⁾ イスラーム法で禁止されていること。肉体、即ち人間は物質主義の虜であり、この世のすべてを物質主義に考え、罪に陥ってしまう。

⁽⁴⁾ 「アッラーの外に神はなし」の意で、神を最高の審判者として認めると、この世のどんな権力も恐れる必要はない。

⁽⁵⁾ 神の唯一性を信じる者。

⁽⁶⁾ この世の利害に捕われなくなる。

⁽⁷⁾ 確信した信頼により。クルアーン第37章107節に「われは大きな犠牲でかれをあがない」とある。即ち預言者イブラーヒームが息子のイスマーイールの喉にナイフを当てた逸話。

⁽⁸⁾ 神を完全に信頼する人は偽りの力を恐れないので。預言者イブラーヒームの意、クルアーン第16章120節参照。

⁽⁹⁾ アッラーに傾倒する者は自分の命など省みない。

⁽¹⁰⁾ ハッジ期間外のマッカ小巡礼。

⁽¹¹⁾ 本当に礼拝は醜行と悪事から遠ざける。クルアーン第29章45節参照。

⁽¹²⁾ イスラーム教徒にとり五行のうちの一つ。それによりイスラーム教徒は不必要な願望や欲望から保護される。

⁽¹³⁾ 預言者アリーが征服した城。ここでは一般的な意味の城で、欲望を育てる城の意。

⁽¹⁴⁾ イスラーム教徒にとり五行のうちの一つ。これにより全世界のムスリムが聖地マッカに集まる。イスラームの確信を増大させる。

⁽¹⁵⁾ 西暦622年、預言者ムハンマドとその信奉者たちがマッカからマディーナへ移住したこと。

18. そのような⁽¹⁶⁾実践はイスラーム共同体の資本である
イスラーム共同体という本の⁽¹⁷⁾綴じ糸である。
19. ⁽¹⁸⁾喜捨は富への愛着を終わらせる。
喜捨は共同体の人々も平等も教える。
20. それは神の⁽¹⁹⁾施しの命令で心を強くする
金を施しに多く使えば金への愛着は少なくなる。
21. ⁽²⁰⁾これらすべてがおまえを強くする道具である
もしおまえのイスラームが完全ならおまえは⁽²¹⁾頑丈である。
22. 「おお⁽²²⁾力のお方」と唱えて力の人となれ
おまえが⁽²³⁾土の駱駝に乗れるように。

(3) 第三段階、神の代理

1. もしおまえが⁽¹⁾駱駝曳きならおまえはこの世を支配する
⁽²⁾スライマーンの王冠がおまえの頭の飾りとなる。
2. この国がある限り、おまえはこの国の飾りとなろう
おまえはこの国の⁽³⁾衰えることのない王権の王冠を持つ人になろう。
3. この世で神の代理になることはよいことである
この宇宙を支配することはないことである。
4. 神の代理とはこの世の魂のようである
その存在は⁽⁴⁾偉大な名前の影である。
5. ⁽⁵⁾それは⁽⁶⁾あらゆることの秘密を知っている
それはこの世にアッラーの命令により存在する。
6. それがこの広い世界に天幕を張ると
それはこの⁽⁷⁾古い宇宙を破壊する。
7. その本性は神の真心と真実に満ちて、その表現を望んでいる
したがってその⁽⁸⁾新しい世界が誕生して来る。
8. 部分の世界そして全体の世界のたくさんの世界が
花のように⁽⁹⁾その思想から咲き出て来る。
9. それは今だ熟していない⁽¹⁰⁾本質を完全にする
それは⁽¹¹⁾カアバ聖域から偶像を外に持ち出す。

⁽¹⁶⁾ 断食、礼拝、巡礼、喜捨そして信仰告白の五行の実践。

⁽¹⁷⁾ 全世界のムスリムが地理的限界を自らをイスラーム共同体の一員と考えさせるもの。

⁽¹⁸⁾ イスラーム教徒にとり五行の一つ。

⁽¹⁹⁾ あなたがたは愛するものを（施しに）使わない限り、信仰を全うし得ないだろう、クルアーン第3章91節参照。

⁽²⁰⁾ イスラームの五行の実践。

⁽²¹⁾ 心が。

⁽²²⁾ 力は神の特性の一つ。いつもそれを思い出し神を統治者と認めると力が得られる。

⁽²³⁾ 魂に力が生じるの意。

⁽¹⁾ 魂を支配する。

⁽²⁾ クルアーンに登場する預言者の一人。預言者かつ王として、鳥や動物と話す超能力を有し、風やジン（悪魔）も操った。
クルアーン第27章16～26節、第34章12～13節参照。

⁽³⁾ クルアーン第20章120節参照。

⁽⁴⁾ 神の偉大なさまざまな属性をその中に持つ。

⁽⁵⁾ 神の代理。神がすべてを見て、すべてを知っているように神の代理（敬虔なムスリム）は神と同じような属性を持つ。

⁽⁶⁾ 例えば、滴は部分であるが海はその全体であるように。

⁽⁷⁾ 神の代理は粗末な社会体制を終わりにし、圧制や暴虐の代わりに友愛と公正に満ちた社会を作ろうとする。

⁽⁸⁾ 古い悪を断ち切って新しい魂を吹き込んで。

⁽⁹⁾ 自らの眼識や直観それに神の性質に基づいた。

⁽¹⁰⁾ 神の神秘的認識を持つ霊的認識。

⁽¹¹⁾ 預言者ムハンマドによりカアバ聖殿から偶像が持ち出されて捨てられた。クルアーン第17章81節に「(今や) 真理は下り、虚偽は消え去りました。本当に虚偽は消える定めにあります」とある。即ち神の代理により正しい人間社会が誕生させられる。

10. その琴爪で心の弦から⁽¹²⁾新しい歌がわき出る
その寝たり起きたりすべてがアッラーのためである。
11. ⁽¹³⁾それは老年に若さの調べを教え
それはすべてに若さの色を与える。
12. ⁽¹⁴⁾それは人類に吉報を伝える者であり警告者でもある
それは兵士でもあり指揮官でもあり統治者でもある。
13. それは神によって⁽¹⁵⁾物の名を教えられた者である
それは⁽¹⁶⁾エルサレムのマシッドまで一夜のうちにいった者である。
14. その⁽¹⁷⁾白い手は杖で頑丈である
その完全な力はその知識をつながっている。
15. ⁽¹⁸⁾その騎手が手に手綱を取ると
時代の馬は更に速くなる。
16. その畏怖は⁽¹⁹⁾ナイル川をも水を乾かせてしまう
エジプトからイスラエル人を脱出させる。
17. その⁽²⁰⁾「立て」の言葉で体の墓の中に立つ
死んだ命が、庭園のもみの木が立つように。
18. ⁽²¹⁾その存在が宇宙の存在の論拠である
⁽²²⁾その偉大さでこの世の救済がある。
19. ⁽²³⁾その影で粒子も太陽を知ることになる
⁽²⁴⁾その資本でこの存在の価値も高い。
20. ⁽²⁵⁾それはその行動力の奇跡で新しい生を与える
それは行動の新しい仕方を作り出す。
21. その足跡からたくさんの顕現が出る
たくさんの⁽²⁶⁾ムーサーがシナイ山を闊歩する。
22. ⁽²⁷⁾それは人生の新しい解釈をする
それはその夢に新しい註釈を加える。
23. ⁽²⁸⁾その隠された人格は人生の秘密である
それは人生の楽器の聞かれない歌である。
24. 新しい考えと主題を結びつける⁽²⁹⁾自然は血を流すほどである
その神の代理人の存在について二つの半句が均衡が取れるようになるために。

⁽¹²⁾ 以前は心は不信仰や多神教に補われ人間への友愛を欠いていたが、そのメッセージにより神の唯一性にあふれた心となる。

⁽¹³⁾ 神の代理は神の唯一性の叫びを高くし、弱い人間の中に大きな情熱を生ませる。

⁽¹⁴⁾ 神の代理、即ち敬虔なムスリム。

⁽¹⁵⁾ クルアーン第2章31節参照。

⁽¹⁶⁾ クルアーン第17章1節参照。

⁽¹⁷⁾ 預言者ムーサーの手。アッラー(神)によりさまざまな奇跡を起こす力が与えられている。クルアーン第20章18~22節参照。

⁽¹⁸⁾ 神の代理人は時の囚人である代わり、時を征服して変革や革命をもたらす。

⁽¹⁹⁾ 預言者ムーサーはイスラエル人を連れて逃げていくと、前方にナイル川が見えた。しかし神の言葉に従い杖でナイル川をたたくと水が引いた。ムーサーはイスラエル人と川を渡りきると追手のフィルアウンの軍勢が追ってきたがフィルアウンは川を渡れず、ムーサー達は命拾いした。クルアーン第26章63節参照。

⁽²⁰⁾ 死んだ者に対し、キリストが「立て」と言ったら生き返ったという奇跡。

⁽²¹⁾ この行は預言者ムハンマドの誕生を指している。即ち預言者ムハンマドが生まれなかったら、この世も生まれなかった。

⁽²²⁾ 神の代理人であることにより、世界のすべての誤まった力がそれを、即ち神の代理人を恐れる。偉大さとは宇宙を救済する力。

⁽²³⁾ 神の代理人のせいで人類も神の偉大さを知る。

⁽²⁴⁾ イスラームの諸学や精神力で。

⁽²⁵⁾ 預言者ムハンマドのように神の代理人は人間社会に革命を起こす。

⁽²⁶⁾ クルアーン第28物語章の中に出てくるムーサーのようなたくさんの奇跡が表われる。

⁽²⁷⁾ アラブのジャーヒリア(無明な時代)に預言者ムハンマドが現われ新しい社会を作ったように。

⁽²⁸⁾ 人生の真実やその目的は神の代理人の存在や行為で明らかである。

⁽²⁹⁾ イクバルは自然が花開くような営みを詩人が詩を作る営みと同じと考える。

25. ⁽³⁰⁾ わが土の一握りが天に届く
その土埃からその⁽³¹⁾ 名騎手が現われる。
26. わが今日の灰の中に眠っている
わが世界を燃やす明日の⁽³²⁾ 炎が。
27. わが蓄はその裳裾に花園を用意している
わが目は⁽³³⁾ 明日の朝で輝いている。
28. さあ、神の代理人よ、時の馬に乗れ
さあ、⁽³⁴⁾ 可能性の目を輝かせよ。
29. ⁽³⁵⁾ おまえは世界の万物の輝きとなれ
そして⁽³⁶⁾ 目の瞳の中に住め。
30. ⁽³⁷⁾ 世界の諸民族の反乱を鎮めさせよ
自らの⁽³⁸⁾ 歌を聴くのに天国のような心地よさにせよ。
31. 神の代理人は、立ち上がれ、そして友朋関係を作れ
愛の酒の杯を再び回せ。
32. もう一度、世界に平和の日々をもたらせ
もう一度、平和のメッセージを出せ。
33. 人類は畑でおまえは⁽³⁹⁾ その収穫
おまえは人生の⁽⁴⁰⁾ 隊商の目的地である。
34. 木々の木の葉が秋の⁽⁴¹⁾ 暴虐で散ってしまった
春の園のように、⁽⁴²⁾ おまえは、賑わわせてくれ。
35. わが子供たちの、若者たちの、そして老人たちからの跪拝を
おまえは受け取れ、われら恥ずかしさ一杯の額から⁽⁴³⁾ 迸り出る跪拝を。
36. ⁽⁴³⁾ おまえの存在でわれらは栄光を得る
それ故この世の苦痛にもかかわらず耐え忍んでいる。

第X章

預言者アリー・ムルタザーの名前の秘密の説明。

1. 大胆な族長である⁽¹⁾ 預言者アリーは最初にイスラームに改宗した者である
そして預言者アリーは愛に対して誠実な者の⁽²⁾ 根源である。
2. ⁽³⁾ わたしは彼の家族愛により生きている
わたしはこの世で真珠のように輝いている。

⁽³⁰⁾ わが名騎手が視界から消えて散らばった。

⁽³¹⁾ 散らばった名騎手、即ち神の代理人が現われイスラーム共同体に正しい道を示す。

⁽³²⁾ 神の代理人。われわれの現状は灰のようであるが、神の代理人が人間的友好のある社会に変えて行く。

⁽³³⁾ イスラーム共同体の中に生まれる神の代理人。

⁽³⁴⁾ 宇宙の可能性。神の代理人、時代を正しい方向に導け。

⁽³⁵⁾ 神の代理人がこの世界を正しい方向に動かすと世界は平和と平安の方に向かう。

⁽³⁶⁾ 神の代理人の存在で世界の人々は正しい方向に進めるの意。

⁽³⁷⁾ この作品は1915年に書かれたが、第一次大戦は1914年に始まったのでその方への言及。

⁽³⁸⁾ この現状を変える者は神の代理人であり、それがもたらすメッセージ。

⁽³⁹⁾ この世は神の代理人なしでは荒廃である。

⁽⁴⁰⁾ 神の代理人なしでは人間は正しい道を行けない。即ちおまえは道しるべである。

⁽⁴¹⁾ 暴虐な民族が世界の平和を破壊させた。

⁽⁴²⁾ 神の代理人は。

⁽⁴³⁾ 神の代理人はイスラーム共同体より立ち上がる。それ故その存在は共同体にとり誇りとなる。現状は憂慮すべき状態だがそれに耐える準備はある。

⁽¹⁾ スンナ派のイスラーム共同体史観では、第4代正統カリフ(在位656～61年)。シーア派では初代イマーム。(生年不明～661年)。

⁽²⁾ 神への愛において無比なので、愛の根源と言っている。

⁽³⁾ イクバル自身。イクバルは預言者アリーに対し限らない尊敬を表現している。

3. わたしは水仙である、⁽⁴⁾ その光景に陶酔している
わたしは⁽⁵⁾ その花園で芳香のように漂っている。
4. もしわが土から⁽⁶⁾ ザムザムの泉が湧き出るとそれはあのお方のお陰です
もしわが葡萄の木から酒が流れ出るとあのお方のお陰です。
5. わたしは土埃である、だが預言者アリーのお陰で⁽⁷⁾ 鏡になった
わが胸の中にわたしはその⁽⁸⁾ 声を見ることが出来る。
6. その顔から預言者ムハンマドは吉報を得た
イスラーム共同体は⁽⁹⁾ 彼の威厳により栄光を得た。
7. 彼の指図は明瞭な宗教の法である
⁽¹⁰⁾ 彼の一族により宇宙は法を得た。
8. ⁽¹¹⁾ 神の預言者は彼を「土の父」と呼んだ
神は聖クルアーンの中で⁽¹²⁾ 「アッラーの御手」と呼んだ。
9. 人生の秘密を知っている誰もが
預言者アリーの秘密は何か知っている。
10. その名が体である⁽¹³⁾ 黒い土
わが知能はその暴虐で悲嘆に暮れている。
11. 空の高みまで達する思考はそのせいで地を這い回る
またそのせいで目は盲目、耳は聞えず。
12. その手には貪欲のせいで両刃の剣を持つ
アッラーの道を行く者の心はその追剥に負けてしまい。
13. ⁽¹⁴⁾ 神の獅子はその土を征服した
そしてその黒い土を金に変えた。
14. ⁽¹⁵⁾ ムルタザ、その剣により真実が輝いたが
彼は⁽¹⁶⁾ 肉体の王国を征服し「土の父」となった。
15. 国を征服する者は⁽¹⁷⁾ 勇気によってである
その真珠の色艶は自制心からである。
16. この地上で土の人になれる者は
⁽¹⁸⁾ 西から太陽を戻せる力を持つ者である。
17. ⁽¹⁹⁾ 体という馬に鞍を付けた人は
王国という印章の上の宝石のような位置を得た。
18. この世では彼の足下に⁽²⁰⁾ ハイバルの城塞のような威武堂堂さがある

⁽⁴⁾ 預言者アリーのいる姿を思い浮かべて。

⁽⁵⁾ 預言者アリーの家族と関係があるように。

⁽⁶⁾ マッカの聖モスク内にある泉の名。イスマエールが水を求めてハーザルとさまよっていた時、彼のもとへ天使が下りてきて翼で地面をたたくと水が湧き出た。イクバルはその詩作で眠っている民族の中に一つの新しい魂を吹きこむと、民族が眠りから覚めた。

⁽⁷⁾ 預言者アリーのお陰でイクバルは穢れが洗われ清い心になったの意。

⁽⁸⁾ 普通、声は見ないものだが。

⁽⁹⁾ 預言者アリーの存在。

⁽¹⁰⁾ その一族がいなかったらこの世に間違った勢力が広がった。

⁽¹¹⁾ 預言者ムハンマド。アリーは人助けをし、そのお礼に2、3粒の棗椰子をもらって食べイスラーム寺院の床の上で横になっているのを預言者ムハンマドが目にして、「土の父」と呼んだことに由来する。

⁽¹²⁾ クルアーン第48章10節参照。

⁽¹³⁾ 物質主義。

⁽¹⁴⁾ 預言者アリーの意。アリーは土である体や情欲を練金業に変え、アッラーの喜ぶものにした。

⁽¹⁵⁾ 預言者アリー。

⁽¹⁶⁾ 物質主義に基づく貪欲の制圧。

⁽¹⁷⁾ 預言者アリーには偽りの力と対抗する力があり、その性質には自制心があった。

⁽¹⁸⁾ 預言者アリーの奇跡の一つ。アリーは戦場にあったが、午後の礼拝をしないうちに太陽が沈みかけたので、西の空に沈み加減の太陽を呼び戻したという奇跡。

⁽¹⁹⁾ 物質主義を征服した人はこの世の征服者である。

⁽²⁰⁾ 預言者ムハンマドはハイバル遠征を行ない、その遠征の力になったのがアリーでハイバルに堅固な城塞があり628年、それを落した。

- あの世では彼の手は⁽²¹⁾コーサルの泉の甘い水を分け与える者となる。
19. 彼は自己をよく知ることでアッラーの手となった
そしてアッラーの手で彼は宇宙を支配した。
 20. ⁽²²⁾彼の性格は諸学の町の門
彼の命令でヒジャーズ、中国、ローマとすべてが統治された。
 21. ⁽²³⁾おまえは自らの土の上で統治者とならねばならない
自らの葡萄のつるから輝く酒を飲むために。
 22. 灰になることは蛾の宗教である
⁽²⁴⁾土の父となれ、これこそ勇者である。
 23. 石となれ、デリケートな花のような体のものよ
花園の壁の基礎となれるように。
 24. おまえはその泥で一人の人間を作れ
そしてその人間のために新しい世界を作れ。
 25. もしおまえが壁や城門を作らなければ
他の者がおまえの土でレンガを作るだろう。
 26. 気ままな空の横暴に困惑している者よ
⁽²⁵⁾おまえの酒杯は石の暴虐を零しているぞ。
 27. うめきや叫び、哀悼はいつまで
絶えず胸をたたくのはいつまで。
 28. 人生の目的は行動に隠されている
創造の楽しみは人生の法である。
 29. 立て、そして新しい世界の創造主となれ
火の中に座って、火を被り⁽²⁶⁾ハリールのような名声を得よ。
 30. ⁽²⁷⁾不一致の世界に生きることは
戦場で武器を捨てていることである。
 31. ⁽²⁸⁾鍛えられ経験ある自尊心を持つ人間
時代はその人間に従って動いていく。
 32. もし時代がその人の気質と合わないなら
その人は天と争う。
 33. それは宇宙の基礎を根絶する
そして⁽²⁹⁾分子に新しい形態を与える。
 34. それは時代の回転を混乱させる
青い色の空の巡りを混乱させる。
 35. それは自らの力で知らせる
心地よい新しい時代を。
 36. この世で男らしく生きられないなら
⁽³⁰⁾勇者のように命を預けることが人生である。
 37. 健全で力強い人は試す
自分の力を偉大な事にぶっつけて。
 38. 難しいことへ愛を抱くことはよい

⁽²¹⁾ 天国にある泉。

⁽²²⁾ 預言者ムハンマドは、わたしは知識の町、アリーはその門であると、ハディースは語る。

⁽²³⁾ 人間は欲望を支配し自分の隠れた力を知りそれを利用せねばならない。

⁽²⁴⁾ 欲望を征服し、預言者アリーのようになれ。

⁽²⁵⁾ 泣き言はいわず自分が人生の主となるよう努力せよ。

⁽²⁶⁾ 純粋な一神教の預言者イブラーヒームのこと。敵により火の中に投げこまれたがその火が冷たくなった。クルアーン第21章69節参照。

⁽²⁷⁾ 神に背く力と共に生きることは崩壊の原因。

⁽²⁸⁾ 自分の能力を知った敬虔なムスリム。

⁽²⁹⁾ 新しい社会を作る。

⁽³⁰⁾ 誤った力と衝突して勇敢に死ぬ。

- ⁽³¹⁾ハリールのように花の炎を摘むことはよい。
39. 行動の人の可能性は
好む困難さにより分かる。
40. 勇気を失った人の武器は嫉妬と敵意だけである
これが彼等の人生にとっての唯一の法である。
41. とはいえ人生とは力の表れである
その本質は征服の喜びである。
42. ⁽³²⁾不適當を許すことは人生に対する血が冷めてしまったことである
この行動の仕方とは人生という詩の中で詩の律の乱れてしまったことである。
43. 屈辱の底に陥った者は誰でも
その衰弱を満足と言う。
44. とはいえ衰弱は人生の略奪者である
その内面は恐怖と欺瞞に満ちている。
45. その中は良い物がない
その牛のミルクは悪い物で一杯である。
46. やさしい知恵の物主よ、注意せよ
その⁽³³⁾敵はいつもおまえを待ち伏せている。
47. もし賢明ならそれに騙されるな
カメレオンのようにいつもそれは色を変えるので。
48. 目の利く人でもその姿を見極められない
その代わりその上に幾つものペールを掛けてしまう。
49. 時々その悪に対し優しさや穏やかさが幕となってしまふ
時々それらが無力を覆い隠す幕となってしまふ。
50. ⁽³⁴⁾時々それは強制の幕に隠されている
時々それは止むを得ないことになってしまっている。
51. 時にこれは顔を⁽³⁵⁾怠惰の姿で表わし
このようにして力ある人の手から心を奪った。
52. 真心はエネルギーと対をなす
もしおまえが自分の力を知っているならそれはおまえのために⁽³⁶⁾ジャム王の杯である。
53. 人生は畑でありその収穫は力である
⁽³⁷⁾正しさと誤謬の秘密の説明は力である。
54. もし⁽³⁸⁾主張者が力に関して多くを持つなら
その主張者はどんな証明の必要はない。
55. 誤謬は力により神の威厳を得る
神を無効にして自らを神と考える。
56. その⁽³⁹⁾「有れ」の言葉で天国の泉の水が毒水になる
善を悪と言い、善が悪になる。
57. 人間よみなさんは⁽⁴⁰⁾信託の意味が分からない
みなさんは両世界の中、自分自身を何よりも優れている者と考えねばならない。
58. おまえは人生の秘義を知っていよう
おまえは神以外の者に対しては⁽⁴¹⁾残虐で無知であれ。

⁽³¹⁾ 預言者イブラーヒーム。

⁽³²⁾ 人間社会の潰瘍に手加減を加えることは人間社会に暴虐を働くこと。

⁽³³⁾ 衰弱や不活発。

⁽³⁴⁾ 力のない者が言い訳として使う手段である。

⁽³⁵⁾ 力ある人が獲物になり自分の能力を忘れさせる程の魅力を持つ。

⁽³⁶⁾ 古代イランのジャムシード王が持っていたとされる杯で、そこに外の世界が見えた。

⁽³⁷⁾ 正しくあれ誤謬であれ、力に基づき肯定も否定もされる。

⁽³⁸⁾ 誤りの力は自らの行為を合法とする。

⁽³⁹⁾ かれが「有れ」と仰せになれば、即ち有る。クルアーン第6章73節参照。

⁽⁴⁰⁾ 神の決められた法の遵守。クルアーン第33章72節参照。

⁽⁴¹⁾ 神以外のどんな統治者も完全でないので、それは認めるなの意。

59. 賢人よ、⁽⁴²⁾目を耳を唇を開けよ
もしそれで、神の道が見えないなら⁽⁴³⁾わたしを嘲笑せよ。

第Ⅹ章

(1) サイド・マクドゥーム・アリー・フジュウィーリーの許に来て、敵の暴虐を嘆く⁽²⁾メルヴ出身の若者の話。

1. イスラーム共同体で尊敬される方である⁽³⁾フジュウィルの預言者ムハンマドの子孫は^{サイド}その墓は⁽⁴⁾サンジャルの聖者にとり聖所である。
2. 彼は山々の険しさを乗り越えて⁽⁵⁾インドの地に跪拝の種を撒いた。
3. ⁽⁶⁾ファールークの時代がその御方の偉大さによって蘇った
その言葉により神は遠くまで広がった。
4. その御方はクルアーンの名誉ある後见人だった
その目で⁽⁷⁾偽りの家を粉々にした。
5. パンジャープの地は⁽⁸⁾その御方の息で新しい命を得た
わが朝はその御方の太陽で光り輝いた。
6. その御方は愛に酔い、⁽⁹⁾愛の鳥の使者でもあった
その御方の額から愛の秘密が迸り出していた。
7. わたしはここでその御方の完璧さについての物語をしたい
わが努力は⁽¹⁰⁾蓄の中に庭全体を含ませることである。
8. その長身か糸杉の糸杉のような高さの若者が
メルヴの町からラーホールに着いた。
9. 彼はその尊い御方の前に行った
太陽がその暗黒を遠のけてくれるように。
10. 彼は⁽¹¹⁾申し上げた、「わたしは敵の陣営に包囲されております
わたしは石の間に挟まれているガラスの水差しのです。
11. わたしにお教え下さい、天のような高き御方よ
敵の中で生きることを」
12. その賢明な導師、その人柄の中で優しさが⁽¹²⁾威厳と一体となって愛となっていたが。
13. その導師は言った、「人生の秘密を知らない者よ
おまえは人生の始まりも終わりも知らない者だ。
14. 敵の心配から解き放たれよ

⁽⁴²⁾ 目は天地の自然の神秘を見るために、耳はクルアーンの言葉とその意味を聞くために、唇はクルアーンの読誦で学んだ真理を同胞に伝えるために開けよの意。

⁽¹⁾ ガズナ出身の神秘主義者。ウルドゥー語圏ではダーター・ガンジュ・パフシュの尊称で有名。ラーホールで没するまで、旅を通じて各地で学識を積み、『隠されたものの開示』はペルシア語によるもので、神秘主義の古典理論の著作で有名。1009/10~1072年(一説に1076年)。

⁽²⁾ イラン北東部のホラーサーン州にある都市。

⁽³⁾ サイド・マクドゥーム・アリー・フジュウィーリーのこと。

⁽⁴⁾ アフガニスタンで創始されたチシュティー教団の活動を12世紀、インド北部のアジュメールを中心に広めたムイヌッディーン・チシュティー(1236年没)のこと。

⁽⁵⁾ インドのパンジャープ地方にイスラームの基礎を置いた。

⁽⁶⁾ 第2代正統カリフ(在位634~44年)、ウマル・イブン・ハッターブの称号でその意味は真偽を分かち人。当時はイスラームにとって迫害期で、彼の改宗により布教が公然化し、カアバ聖殿でムスリムの礼拝が可能となった。

⁽⁷⁾ 不信仰と多神教を崩壊させようとした。

⁽⁸⁾ パンジャープのラーホールに住んでいた。

⁽⁹⁾ イスラームの布教者。

⁽¹⁰⁾ 滴の中に川の全体を入れるようなこと。

⁽¹¹⁾ その聖者に。

⁽¹²⁾ 完全な愛を持ち、敵を愛した。

- おまえは眠っている力だ、目覚めよ。
15. 石が自らをガラスと考えると
⁽¹³⁾ ガラスになり壊れる。
 16. もし旅人が自らを力なしと考えたと
 自分の命の現金を追剥に預けてしまうことになる。
 17. おまえはいつまで自分を⁽¹⁴⁾ 水と泥で出来ていると考えているのか
⁽¹⁵⁾ その土からシナイ山の炎を作れ。
 18. おまえの⁽¹⁶⁾ 友に不機嫌とはなぜか
 敵に不平を言うとはなぜか。
 19. わたしは本当のことを言おう、⁽¹⁷⁾ 敵もおまえの友である
 その存在はおまえの市の輝きである」
 20. ⁽¹⁸⁾ 自我の発展過程を知っている者はみな
 もしその敵が強くてもそれを神の恵みと考える。
 21. 人間の畑にとって敵は⁽¹⁹⁾ 雲の位置を持つ
 それは人間の可能性を眠りや怠慢から目覚めさせる。
 22. もし人間の勇気が力強ければ道の石も水のようなようである
 洪水にとっては道の起伏など何の重要性もない。
 23. 道の石は意志の剣の砥石である
⁽²⁰⁾ 目的地まで到着することは意志の剣の試練である。
 24. 獣のようにただ食べたり休んだりすることでは何の益か
 もし自我に強さが生じないなら存在することは何の益か。
 25. おまえは自分を自我で強くすれば
 もし欲するなら世界を混乱させることも出来る。
 26. もしおまえが消滅を望むなら自我を気にするな
 もし生を望むなら自我と共にあれ。
 27. 死ぬとは何か、自我に気付かないことである
 おまえは思うか、死とは命や体との別離だと。
 28. ⁽²¹⁾ ユースフのように自我の中に住め
 彼は囚人より皇帝に到るまでの道を辿った。
 29. 自我が熟考して勇気ある人となれ
⁽²²⁾ 神に仕える人となり、秘義を持つ人となれ。
 30. わたしは物語によって秘密を説明する
 そしてわが息の力で蕾を開かせる。
 31. 「楽しいことである、⁽²⁴⁾ 愛する者の秘密を
⁽²⁵⁾ 他の人の話で語るのは」

⁽¹³⁾ 真の信者なれば、かれら（悪魔）を畏れずわれ（アッラー）を畏れよ。クルアーン第3章 175 節参照。

⁽¹⁴⁾ ちっぽけな哀れな人間。

⁽¹⁵⁾ アッラーを真に愛する者になれ。そうすれば恐れるものはなくなる。

⁽¹⁶⁾ 敵の意。敵に不機嫌であるのは勇気のない証拠である。

⁽¹⁷⁾ 敵がいることで自らも強くなれるので。なお、導師即ちダーター・ガンジュ・バフシュの言葉はここで終わる。

⁽¹⁸⁾ この対句、即ち対句 20 以下はイクバル自身の見解である。

⁽¹⁹⁾ 雲は慈雨をもたらすので。

⁽²⁰⁾ 険しい道を踏破すること。

⁽²¹⁾ クルアーン第 12 章の全部が預言者ユースフについての話となっている。そこに人間の自我が強いと大きな不幸に会いながらも最後は人間として高い地位が得られることが示されている。

⁽²²⁾ 人間が真理と真実のため誤った勢力の前に踏み止まると、その上に宇宙の秘密が覆いを取り除きそれで秘義の人となる。

⁽²³⁾ 対句 31 はルーミーの詩から引用。

⁽²⁴⁾ 神の秘密。

⁽²⁵⁾ 愛する者（神）の秘密が直接話されると、理解の遅い人はそれが理解できないことで、争いが起ることがある。しかし比喩でそれらを語ると、理解力のある者は理解し、混乱の起る心配がない意。

第Ⅷ章

喉の渇きに耐えられなくなった鳥の話。

1. 一匹の鳥が喉の渇きで喘いでいた
息がその体の中で波のように波打っていた。
2. 鳥は庭にダイヤの欠けらを見た
喉の渇きで鳥はそれを水の滴と考えた。
3. 太陽の輝きで輝いているその欠けらに騙されて
愚かな鳥は石を水と間違えてしまった。
4. 鳥はその宝石から水の滴は得られなかった
鳥はその上を嘴でつついたが口は濡れなかった。
5. ダイヤは言った、欲望に捕われている者よ
おまえはわたしに欲望の嘴を鋭くした。
6. わたしは水の滴でない、酌人でもない
わたしは他の人のために生きている者でもない。
7. おまえは⁽¹⁾わたしを苦しめようとしている気のふれた者か
自分の自我を見せることを知らない者よ。
8. わが輝きは鳥の嘴を壊してしまう⁽²⁾
人間に対しても命の真珠を壊してしまう。
9. 鳥はその心の願望をダイヤのせいでは得られなかった
その輝くものから顔を背けなければならなかった。
10. その胸の中に悲しみがたまった
その喉のさえずりが不平になった。
11. バラの花の枝の上で露の滴が³
小夜鳴鳥の目の涙のように輝いていた。
12. ⁽³⁾その輝きは太陽に感謝を捧げることで消えた
⁽⁴⁾太陽への恐れで体に震えが走った。
13. ⁽⁵⁾それは天の息子で落ちる癖を持つ星
それは一時自分を表現する好みで止まったものだ。
14. それは⁽⁶⁾蕾や花に幾度となく騙され
生を少しも楽しまないもの。
15. それは心を与えてしまった恋する男の涙のようで
それはまた涙を流し睫の飾りの役をしているものか。
16. 落ち着きを失った小鳥は花の枝に止まった
⁽⁷⁾露の一滴がその口の中に入った。
17. 敵から自分の命を救いたいと願っている者よ
わたしは聞きたい、⁽⁸⁾おまえは滴かそれとも真珠か。
18. 鳥は喉の渇きで苦しんだ時
⁽⁹⁾鳥は他の命によって自分の命を救った。
19. ⁽¹⁰⁾露の滴は固さを持つ真珠のようなものでない

(1) ダイヤ。ダイヤは飲み込まれない固い物である。その意味は自分の自我を確立している。

(2) ダイヤの固さは自我の強さの原因となっている。それに基づき自我の強いものは外部からの害が与えずらい。

(3) 露の輝きはその上に日光が出たことによる。

(4) 太陽が出るや露の存在は終わった。

(5) 露とは熱の一つの姿で空より落ちる。それで天の息子と言う。

(6) 太陽が照る時、蕾や花は露が消えることに心配しない。

(7) 露はやさしく自我が出来ていず自分の保護が出来ていなかったのだ。

(8) おまえは自我が強いのか弱いのか。

(9) 強者が弱者を食う法則。

(10) 露の自我は弱く、ダイヤのそれは強い。

- 固いのはダイヤの欠けらで滴ではない。
20. 一瞬も⁽¹¹⁾おまえは自我の保護を忘れるな
ダイヤの欠けらになれ、露にはなるな。
 21. 山のような堅固な土台を持つ者となれ
海を一杯にする百の雲の持主となれ。
 22. 自らを確信して、自分を知れ
⁽¹²⁾水銀を固めて銀とせよ。
 23. 自我の弦で曲を奏せよ
⁽¹³⁾自我の秘密を人々に明らかにせよ。

第XIII章

ダイヤと石炭の話。

1. わたしはもう一度真実の扉を開けたい
おまえにもう一つの話をする。
2. 石炭は鉱山でダイヤに言った
永遠の輝きを持つ者よ。
3. われら両者は同僚で生活は同じである
この世でわれわれの土の存在も同じである。
4. わたしは鉱山で劣悪な苦痛で死ぬ
おまえは王の王冠にまで達せられる。
5. わが価値はこの醜さのせいで泥よりも低い
あなたは其の美しさで鏡の心も⁽¹⁾粉々にしてしまうというのに。
6. わが暗黒さで妒は輝くだけ
そこで宝の完成は⁽²⁾灰になるだけ。
7. 足裏で誰もがわたしを踏ん付ける
誰もがわが体の物体に火を付ける。
8. わが様子とは涙するものである
わが人生の様子を誰か教えてくれたことがあるか、如何なるかと。
9. わたしは互にくっつき合っている煙の波だ
その資本は飛び回っている火花だけだ。
10. ⁽³⁾おまえの顔もおまえの美しさも星のようだ
おまえのどこからも美が飛び出して来る。
11. ⁽⁴⁾時々おまえは王の目の輝きになる
時々おまえは剣の柄の飾りにもなる。
12. ダイヤは石炭に言った、「明敏な友よ
黒い土はその⁽⁵⁾強度のせいで指輪の宝石になった。
13. ⁽⁶⁾それはその周辺のものと同争して
その闘争で石のように固くなった。
14. わが存在は⁽⁷⁾強化で光り輝くものになった

⁽¹¹⁾ 読者よ。

⁽¹²⁾ その弱点を遠のけて自分の力強さとせよ。

⁽¹³⁾ そうすれば誰も危害を加えなくなる。

⁽¹⁾ 羨望のせいで。

⁽²⁾ わたしの完全さは灰の中にある。

⁽³⁾ ダイヤモンド。

⁽⁴⁾ ここまでの対句で弱い自我を持つことはどういうことかの説明があった。

⁽⁵⁾ 自我の強さのせいで。

⁽⁶⁾ 黒い土。

⁽⁷⁾ 自我の強化で。

わが胸は顕現で溢れた。

15. それに反しておまえは自我の未熟のせいで卑しくなってしまった
自我の姿の軟弱さのせいで⁽⁸⁾ 焼けてしまった。
16. 恐怖、悲しみ、出鱈目より自由になれ
⁽⁹⁾ 石のように硬くなりダイヤモンドなれ。
17. ⁽¹⁰⁾ 両世界は輝く
誰もが努力をし、強くなれば。
18. 土の一握りが⁽¹¹⁾ カアバ聖殿の⁽¹²⁾ 黒石の基である
カアバ聖殿の下から頭を外に出している黒石の。
19. その地位は⁽¹³⁾ シナイ山より高い
⁽¹⁴⁾ それは虜の色にかかわらずすべての人が口付けするものである。
20. 人生の誇りとは成熟と堅固さである
ひ弱さや⁽¹⁵⁾ 無能力は未熟さの別名である」

⁽⁸⁾ 他人の手により卑小させられてしまった。

⁽⁹⁾ 自から強くなれば攻める者はいなくなる。

⁽¹⁰⁾ ダイヤの光であたりが輝やくように努力と行動により人間社会は人間性が輝き出し、暴力や不正の暗さが一掃される社会となる。

⁽¹¹⁾ マッカの聖モスクのほぼ中心にある、石造りの立方体の形をしたイスラームの聖殿。

⁽¹²⁾ イブラーヒームがカアバ聖殿を建立した時、天使が運んできた石とされている。巡礼に来たものはこれに口付けをする。

⁽¹³⁾ シナイ半島南部の山。ここでモーセ（ムーサー）が十戒を授かった。

⁽¹⁴⁾ カアバ聖殿の黒石。

⁽¹⁵⁾ 自分の能力をその通りに利用せず、不名誉と屈辱の餌食となる。それ故、自分の自我を強化して尊敬と地位を得て、人生を不名誉から救わねばならない。